

北登会 第7回・歴史を楽しもう会(歴史探訪ハイキング)

平成27年(2009)年10月3日(土)例会資料

(南天の場合、次回に順延)

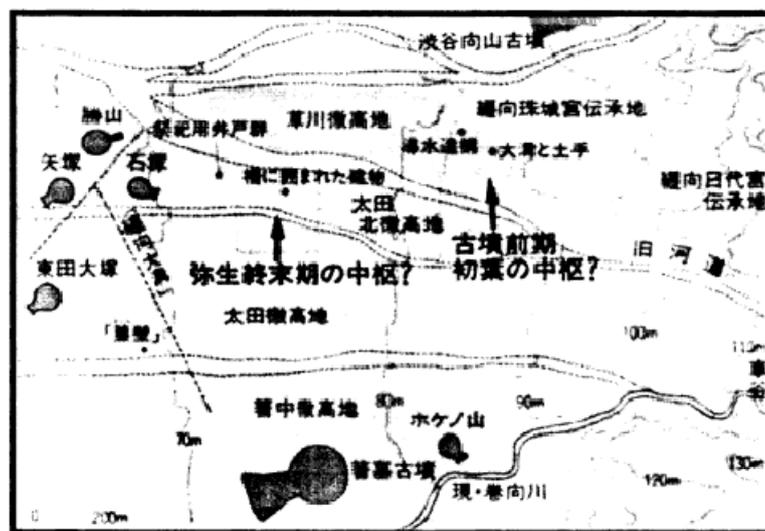
## 卑弥呼の里 纏向遺跡を歩く

(近鉄学園前駅集合 : 午前 9時)

担当 : 3丁目井守徳弘

(予定コース・約 6.6km・一部予定変更)

近鉄学園前駅＝近鉄西大寺駅＝近鉄平端駅＝近鉄天理駅＝JR天理駅＝JR巻向駅－(0.1)－太田池の木製仮面出(太田池)・メクリー号墳－(0.4)－神殿状建物跡－(0.5)－纏向珠城宮跡－(0.3)－珠城山古墳群－(0.5)「纏向日代官跡－(0.2)－相撲神社－(0.3)－大兵主神社－(途中・昼食)－(2.2)－慶運寺－(0.2)－ホケノ山古墳－(0.2)－国津神社－(0.6)－箸墓古墳－(0.4)－三輪そうめん山本－(0.7)－JR巻向駅＝JR天理駅＝近鉄天理駅＝近鉄平端駅＝近鉄西大寺駅＝近鉄学園前駅 (注) (数字はkmを表示) (解散 : 5時ごろ)



『卑弥呼誕生』弥生文化博物館より

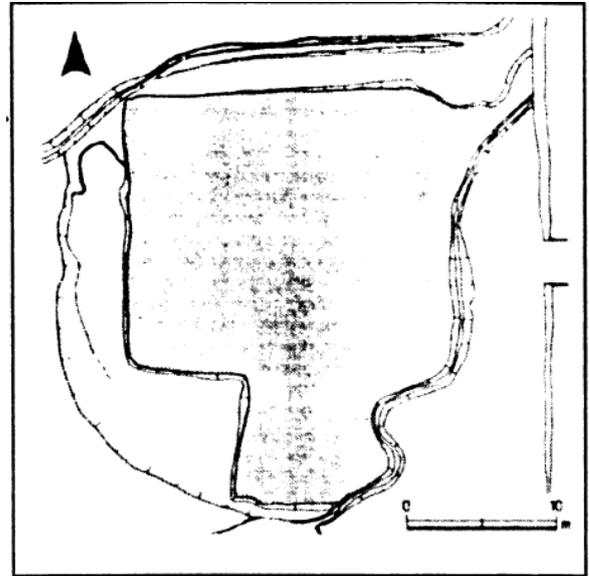
### ●メクリー号墳

昭和 51年 (1979)昭和 61年(1986)にかけて纏向遺跡メクリ地区の調査で確認されたもので、墳丘は後世の削平が著しく、その墳形は残存した周濠によってのみ知ることができた。

墳丘は全長 28m、後方部長 19.5m、後方部幅約 21m、前方部長 9.5mと他の纏向型前方後円墳に比べて 1/3弱鹿度の小さな規模であり、葺石や埴輪はなく、埋葬施設や盛土は削平によって確認されていない。

周濠は後方部東側は削平を受けているものの、北側では幅2.5m、西側で約 4m、クビレ部では約 8.5mであるが前方部前面では約1mと極端に細くなっている。後方部北東部分の周濠はさらに東-延びており、導水溝があった。

纏向遺跡では唯一の前方後方墳であるが、3:2:1の形態はしている。周濠西側から多量の土器群が出土した。築造年代は古墳時代前期初頭の 3世紀後半。現在、削平されており墳丘はありません。

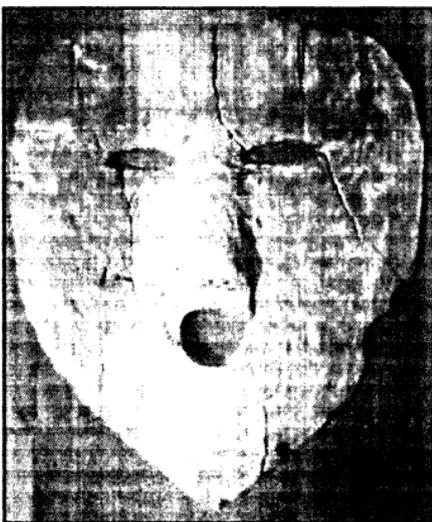


メクリー号墳検出遺構図『卑弥呼誕生』弥生文化博物館より

### ●太田池の木製仮面（第 149次調査・平成 19年）

纏向遺跡のほぼ中央に位置する濯概用池の太田池（大字太田所在）において、住宅地造成工事に先立って実施された。調査期間は平成 19年 4月 2日～平成 19年 5月 24日である。

確認された遺構は、到り抜きの木製井戸枠を持つ井戸や、土坑、ピット、落ち込みなど古墳時代前期を中心とするものが大半であり、外来系を含む多数の土器片や木製品類、銅銭などが出土している。平成 19年 6月 15日、太田池の中央から南西に寄った位置において、地底の土坑（井戸）：より木製仮面出土した。



仮面は長さ約 26cm、幅約 21.5cmで、アカガシ亜属製の鍬を転用して作られています。口は鍬の柄を装着する穴をそのまま利用していますが、目は転用時に穿孔されたと考えられます。鼻は高く削り残して鼻孔の表現も見られ、眉毛は線刻によって表現されており、その周辺にはわずかに赤色顔料が付着していました。

全体に平坦な形態であり、顔に装着するためのひもを通す孔なども見られません。しかしその大きさから考えると、実際に顔につけて使用されたものと考えられます。

3世紀前半頃の井戸から出土しました。

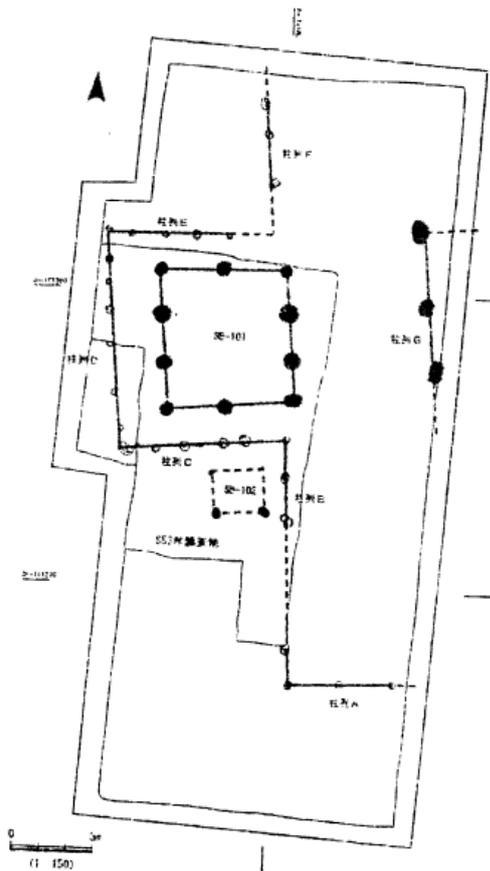
## ● 神殿状建物跡遺跡

第162次調査の調査地は、纏向駅のすぐ西側にあります。南北に旧河道が流れる太田北微高地上に位置し、すぐ西側には祭紀土坑群が広がる地域が存在します。

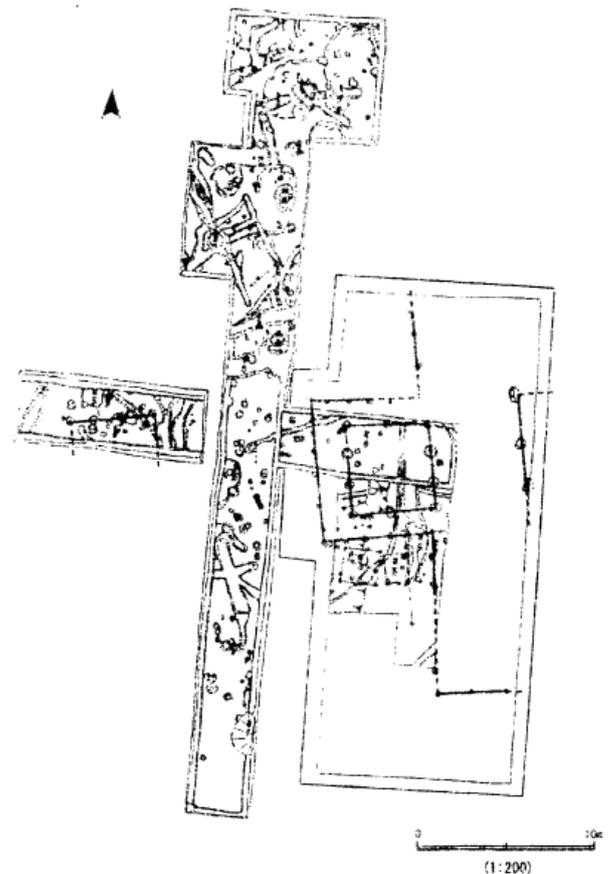
昭和53年の調査（第20次調査）で柵に囲まれた建物(SB-101)等を検出しており、今回の調査はそれらの遺構群の広がりを確認する目的で実施されました。

調査区は南北に傾斜する微高地上に位置しており、その地形に合わせて整地土が厚く盛られ、平坦な土地をつくっています。整地土内からは庄内式期古相(3世紀前半)の土器が出土しており、下層遺構は主にこの時期に構築されます。また、これらは庄内3式期(3世紀中頃)の溝によって壊されていることから、この時期に廃絶するものと考えられます。

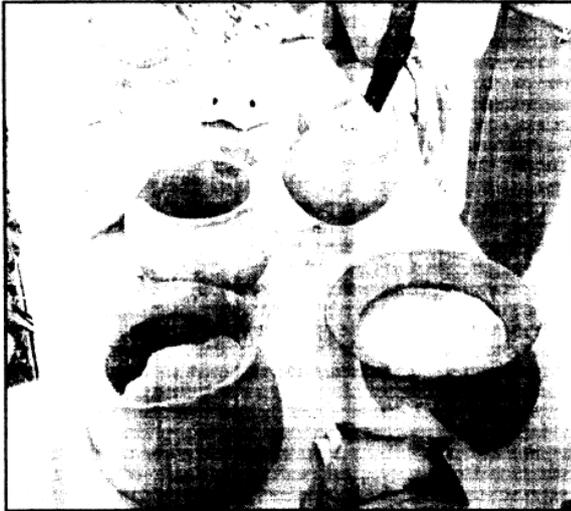
建物SB-101は当初、全面を柱列が囲むものと想定していましたが、今回の調査で柱列は東側に巡らず、南北に伸びていくことがわかりました。そのため、建物の周囲を取り巻く柱列は、南北に直線的に伸びる柱列のラインに対して西側へ張り出すような構造になります。さらに南北に伸びる柱列は調査区内で直角に方向を変え、東へ伸びていく複雑な構造が確認されました。またSB-101の東側では南北2間以上、東西1間以上の建物を新たに検出し、改めて20次調査成果を再検討したところ、SB-101の西側約10.5mの位置に他の柱列と軸線を揃えた柱列の存在も明らかになりました。そのため、大規模な整地を行なった微高地上を東西に3棟の建物と柵などが強い規格性のもとに構築されており、これらの遺構群が纏向遺跡のなかでも何らかの特別な施設の一部となる可能性があります。



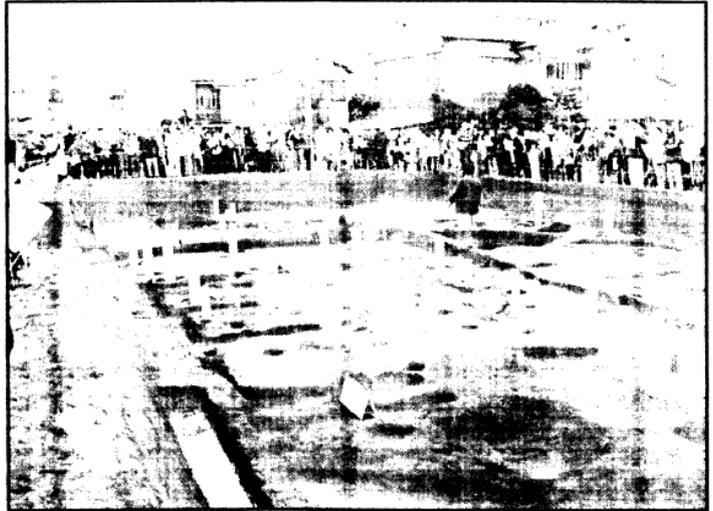
調査区内遺構配置図



辻6 4-1番地内の遺構配置図



出土土器遺物



現地説明会時の写真

### ●纏向珠城宮跡伝承地

国道 169号線を東に 150m、左（北）側の道端に「垂仁天皇纏向珠城宮跡」の石碑が「龍王山」を背にして建った、第11代・垂仁天皇の、「纏向珠城宮跡」伝承地です。『帝王編年記』では、宮の位置を「今巻向河北里の西の田中也」としています。

『帝王編年記』とは僧永祐(南北朝時代の人、伝未詳)の編。神武天皇から北朝の後光厳天皇までを扱っていたらしいが、現在、最後の三巻が散逸しているため、後伏見天皇(13世紀末)までの部分しか伝わらない。

### ◎垂仁天皇の事績

『日本書紀』によると垂仁天皇（活目（いくめ）入彦五十狭茅（いさち）天皇）は崇神天皇の第三子とある。

垂仁天皇元年に父の崇神天皇が崩御され山辺道勾岡上陵（平成 21 年 6 月に見学した柳本の崇神天皇陵・現行燈山古墳）に葬っています。

垂仁 2 年に「纏向に都をつくり珠城（たまき）の宮といた」とあります。

垂仁 3 年に新羅王子の天日槍（あめのひほこ）が神宝を奉じて来朝。

垂仁 5 年に皇后の兄・狭穂彦（さほびこ）が叛乱。皇后薨去。

垂仁 7 年に野見宿禰（のみのすくね）が当麻蹶速（たいまのけはや）と相撲をとり蹴殺す。

垂仁 15 年に丹波道主王の女たちを後宮に入れ、8月にその中から日葉酢媛を皇后とした。

垂仁 25 年に天照大神の祭紀を皇女の倭姫命に託す。伊勢神宮を興した。

垂仁 32 年に日葉酢媛薨去。野見宿禰の進言で、殉死に替えて土偶を葬る（埴輪の起源）。

垂仁 35 年に河内国の高石池や茅渟（ちぬ）池を始め、諸国に多くの地溝を開く。

垂仁 39 年に第 2 王子の五十瓊敷（いにしき）命が剣千振を作り、石上神宮に納める。

垂仁 90 年に田道間守に命じて、常世国の非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）を求めさせる。

垂仁 99 年に天皇崩御。140 歳（紀）、153 歳（記）、139 歳（大日本史）。菅原伏見陵に葬る。

## ●珠城山古墳群（国指定史跡）

「山の辺の道」の西の「タマキヤマ」と土地で呼んでいる海拔 100m、高さ 15m、東西の全長約 200mほどの珠城山古墳群がある。

丘陵の東の最も高い処に、お稻荷（いなり）さんの小祠が祀ってあるこの下が 1号墳。西に 2号墳・3号墳と三基の前方後円墳が縦に列んでいる。

2号・3号墳共破壊されて、石槨（せっかく）などは付近の石垣に変貌してしまった。1号墳は下の道からも横穴式石室の入口が見えており、早くに盗掘されていたらしい。

昭和 30年 9月、国鉄「まきむく」駅設置に先だって発掘したところ、勾玉（まがたま）・金環等の装飾品・環頭大刀・鉄刀子等の武器・桂甲等の武具類・鞍金具等の馬具類・須恵器・土師器等の土器類・並に円筒埴輪の破片等多数の出土しました。

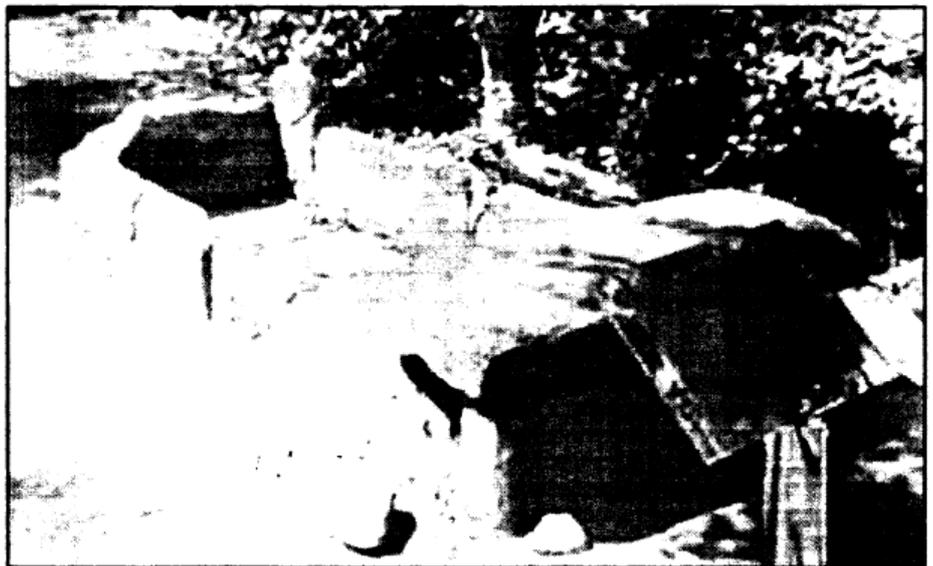
## ●珠城山 1号墳

6世紀後半の前方後円墳で全長約 50m、現状保存されている。横穴式石室で石室内には凝灰岩製組合せの箱形石棺が納められていた。棺底石と上端の破損した側壁石のみが原位置にあり、棺蓋は移動していた一枚の他はことごとく割られ散逸していた。

南側 70cm、北側で 63cmとやや南側が広がっている。石室内から金銅製勾玉、金環、環頭太刀、鉄鏃、桂甲、馬具、土器などが出土しました。現在、箱形石棺は奈良県立橿原考古学研究所付属博物館の東側（正面入口右横）に展示されています。

石室は主軸をほぼ南北にした横穴式石室で、花崗岩の石材を乱石積、その間隙を安山岩系の扁平な石材で積み上げています。

石室は三枚の花崗岩で覆い、その大きさは長さ 3.4m、幅奥壁で 1.65m、羨道部付近で 1.45m、高さ奥壁で 2m、羨道部付



近で 1.95mである。石室は片袖式とも考えられ、羨道は一部失われていたが、現存する部分では長さ 1.3m、幅約 1m、高さ 1.6m、石室の規模としては比較的小規模である。棺底石は四板の切石を組み合わせたもので、前後二枚、左右五枚の側石を立て、ほぼ棺石の厚みだけ側壁石の外側に土砂を入れ、つきかためたのち、遺骸を埋葬し、蓋石を置いていたことが知られています。

### ●珠城山 2号墳

2号墳は前方後円墳で、規模は全長約 90m、後円径約45m。最も規模が大きく西面する。前方部に小型の竪穴式石室が知られているがその遺物や後円部の埋葬施設については明らかでない。

### ●珠城山 3号墳

前方後円墳で全長約 47.5m 西端に位置して東南し、後円部径、前方部幅はともに約 24m前方部端の1部を除きほぼ消滅している。

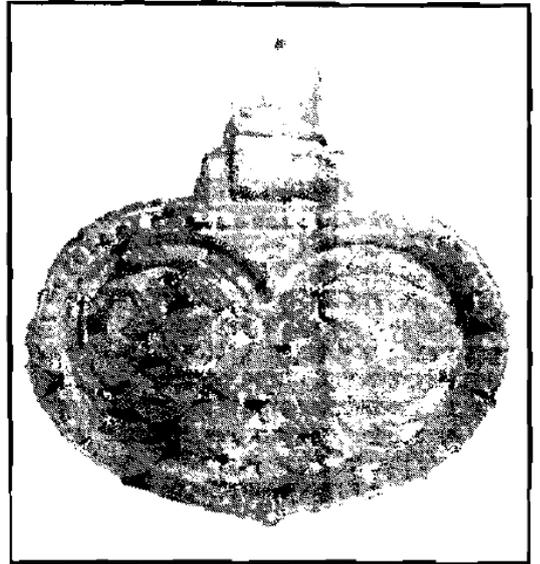
後円部と前方部の南斜面に横穴式石室が築かれていた。後円部の石室は両袖式で、全長9.8m、玄室の中央に家形石棺と羨道部にはみ出した凝灰岩製の組合せ式石棺を安置していた。

羨道の中央部には羨道を区切る仕切石が置かれ、また羨門部には閉塞石が積上げられていたのがよく遺存していた。

前方部の石室は全長 8.7m、片袖式で、若干の遺物が出土した。

出土の遺物は金銅製双鳳文透彫杏葉や忍唐草文透彫鏡板、輪鏝などの優れた馬具類のほか、桂甲小札・大刀・須恵器・土師器などであった。

石棺はなかったが鉄釘の換出されたことから木棺の安置が考えられている。石室には炭と焼土の層があり、土釜土器、瓦器など多数出土し、二次的に火葬墳墓として利用されたのではないかと推定されている。



### ●纏向日代官跡

「山の辺の道」から少し外れて、東の山間部へ辿ると、桜井市穴師（あなし）で、道の脇に石碑「景行天皇纏向日代官跡」が建っています。第12代景行天皇は、第 11代垂仁天皇の第二皇子で、母は比羽州比売命（丹波道王の娘）、妃の伊那毘能（播磨の印南）大郎女との間に五人の皇子が有り、その内二皇子が双生児の大碓（おおす）命と小碓命で、兄の大碓命を殺した日本武尊（『古事記』では倭建命）です。

### ◎景行天皇の事績

景行 4年に天皇は美濃より還り、纏向に都をつくる。これを日大官という。

『帝王編年記』（前述）には「大和国城上（しきのかみ）郡。今卷向檜林是也」とある。

『大和志』は「同郡穴師村の北にあり」とする。

内藤湖南氏（戦前を代表する東洋史学者）は、「この穴師という「あな」ということは「あや」ということと同じで、中国のことで「漢（あや）」を意味している。穴師というところに兵主神社があるのは当時漢人が来て、その奉じて来た神を祀っていた」と述べている。

『古事記』雄略条に「纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の日がける宮」云々の寿歌がある。景行12年に九州熊襲が背いたので、これを征伐。

景行 25 年に武内宿禰を遣わして、北陸・東方諸国を視察させる。

景行 27 年に熊襲が再叛。日本武尊を遣わして、熊襲を征討させる。

景行 40 年に日本武尊に蝦夷征討を命じる。

景行 43 年に日本武尊は能褒野（三重県亀山市）崩御。白鳥陵に葬られた。

景行 53 年に日本武尊を追慕し、東国巡幸。翌年 9 月に纏向宮に帰る。

景行 60 年に崩御、143 歳。『古事記』では 137 歳。山辺道上陵（みちのえ）に葬られた。『古事記』は「御陵は山邊の道上にあり」と記す。現在、同陵は奈良県天理市渋谷町の景行天皇陵・渋谷向山古墳（前方後円墳・全長 300m、平成 21 年 6 月に見学）に比定される。

「痛足＝穴師」を歌った万葉歌があります。

痛足川(あなしがわ) 川波立ちぬ 卷目(まきもく)の  
由槻が嶽(ゆつきがたけ)に 雲居立てるらし

【訳】穴師川には川波が騒ぎ立って来た。卷向の弓月が嶽に雲が湧き起こっているらしい。  
万葉集 1088 柿本人麻呂

纏向日代官跡の南側に大きな流れのある穴師川流れていた。この北側が穴師の里である。穴師は鉱石を採掘する人たちのことを言うが、ほかに機織りをする人の綾師が訛ったとする説や、内藤湖南氏（戦前を代表する東洋史学者）は「あや」ということと同じで、中国のことの「漢（あや）」を意味しているといっており、穴師には兵主神社もあり当時漢人が来て、その人たちが奉じて来た神としています

鉱山で働く人や製鉄のたたらを踏む人には、足に病を持つ人が多いことから「痛足（あなし）」と表記したとされ、この地域が古代の鉱山地区だったと推測される。

この付近の畑の土は赤みを帯びており、かつては、金属が採取された可能性がある。砂鉄が発見されて、渡来系の人々や、太刀作りや鏡作りの人々がここに集うようになって、武器、軍神の性格を持っていったものである。

穴師とは痛足であり、また掘削の穴に通ずるのである。

## ●相撲神社

神社境内の中央に土俵跡、土俵の盛り土の四隅には四本柱の代わりに桧の木が4本植えられている。相撲神社には相撲のはじまりとされる、旧跡カタヤケシがある。垂仁天皇 7年 7月 7日、大兵主神社神域の小字カタヤケシにおいて、出雲国の野見宿禰と当麻蹴速が、日本最初の勅命天覧相撲を行ったと『日本書紀』にあります。これが日本の国技である相撲の始まりとされています。

勝負は互いに足で相手を蹴りあった。野見宿禰の足が、当麻蹴速の肋骨を破り、腰も踏み折ったので、蹴速は血をはいて、あえなく敗死したとあります。キックボクシングのようですね。殺された当麻蹴速の墓は、当麻町にあります。

野見宿禰は、出雲国から呼ばれたとありますが、この出雲国は桜井市の長谷寺の手前（西）にある出雲と考えられます。この出雲には野見宿禰の伝承の多い地であります。さらに野見宿禰は垂仁天皇 32年に日葉酢媛薨去の時、野見宿禰の進言で、殉死に替えて土偶を葬る埴輪の起源（前述）の記述もあります。

土地の名のカタヤケシは、カタヤは方屋（片屋）土俵場、あるいは東西力士の控え

場所という意味のようであるとの説がある。現在の東と西であるが、もとは左右で左は葵のかざし、右は瓢（ひさご）のかざしをつけました。負けると、そのかざしを取り上げられました。ケンハケシカケル意味か？片方を消す意味か？

昭和 37年 10月には時津風理事長（元横綱双葉山）をはじめ大鵬、柏戸の横綱と幕内力全員がこの地を訪れ土俵入りを奉納しています。

### ●大兵主神社

元の穴師坐兵主神社（名神大社）は、垂仁天皇 2年に倭姫命が天皇の御膳の守護神として祀ったとも、景行天皇が八千矛神（大国主）を兵主大神として祀ったともいう。社伝由緒では、旧鎮座地は「弓月岳」であるが、この比定地には竜王山（586m）・穴師山（409m）・巻向山（567m）の3つの説がある。

「弓月岳」を歌った万葉歌があります。

あしひきの 山川の瀬の 響（な）るなべに弓月が嶽に 雲立ち渡る

【訳】 山から流れ落ちてくる川の瀬の音が高くなりひびくにつれて、弓月嶽には一面に雲が立ち渡ってゆく。  
万葉集 1088柿本人麻呂

箸墓古墳の前方部から後円部をつらぬく線上に穴師大兵主神社下社（現穴師坐兵主神社）が鎮座、その延長線上に穴師山がある。箸墓古墳の埋葬者（卑弥呼?）と関連があるのではないかと考えます。

祭神の「兵主神」は現在は中殿に祀られ、鏡を神体とする。神社側では崇神天皇の 60 年、倭姫命が天皇の御膳の守護神として奉祭し御食津神であるとしている。

右殿は若御魂（名神大社）。左殿は大兵主神としている。三殿とも式内社である。「兵主神」は『史記』『封禅書』では蚩尤（しゅう）に相当するとされ、戦の神と考えられている。黄帝と戦った軍神で戦斧、楯、弓矢等の兵器を創始したという。

『史記』は、中国前漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された中国の歴史書である。

「封禅書」は祭紀儀礼について述べたものである。

蚩尤とは天界の帝王である黄帝と戦争をし、獣身で銅の頭に鉄の額を持ち、人の身体に牛の頭と蹄を持ち、頭に角があるなどといわれる。



山東省武梁嗣画像石



山東省折南古墓墓室前室北壁上横額画像

右殿は若御魂は、ヤマタノオロチ退治の説話で登場し、スサノオに救われた後、妻となっている、稲田姫命のことであるとされる。勾玉と鈴を神体とする。左殿の「大兵主神」は、社伝では御神体は剣で、相撲の祖神らしいとされている。

### ●慶運寺

浄土宗三輪山慶運寺は寛永11年（1634）の創建です。本堂は昭和 12年に建立。

本尊は十一面観音立像です。

当山には大和国の最後の検校（当時の盲人社会の最高の位階）であった隈田嘉七の頌徳碑があります。嘉七は、慶応元年（1865）に、検校職に任命されています。

### ●慶運寺境内の石棺

本堂西側の境内に、古墳の石棺に彫られた弥勒菩薩を刻んだ石棺仏があります。凝灰岩製の刳抜式の石棺の身に建治形と呼ばれる弥勒菩薩が刻まれています。

### ●慶運寺裏古墳

本堂のすぐ裏に慶運寺裏山古墳の石室があります。墳丘は円墳と思われる。南面に開口しています。石室は両袖式横穴式（長さ3m、幅1.8m、高さ2m）羨道部は殆ど破壊されている。側石 4段、天井石 3枚で架構されています。

棺・出土遺物は不明。古墳時代後期ですが発掘調査はしていません。被葬者は不明です。説明板によればこの慶運寺周辺には 6基の古墳があったようです。

### ●ホケノ山古墳

墳丘は約 80m、後円部径約 60m、前方部長約 20m、前方部高約 8.5m、の前方部を南東に向けてつくられた前方後円墳です。墳丘の表面には葺石を設け、周囲には周濠を巡らせています。

#### ◎中心主体部

古墳の主人を葬った中心主体部は、後円部中央に南北主軸で設けられた「石囲い木軌である。「石囲い木槨」はわが国で初めて確認された特殊な構造の埋葬施設で、

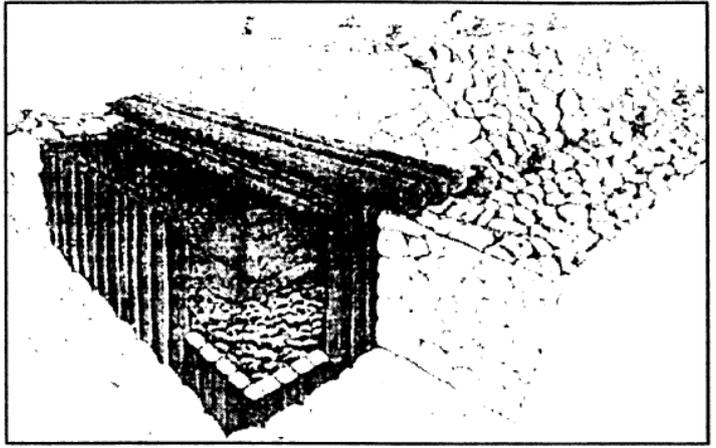
木材で構成した「木槨」の周囲に、河原石を積み上げて「石囲い」をつくるという二重溝造をもっています。使用された石材はハンレイ岩、黒ウンモ花崗岩を主体とし、すべて近在の纏向川から採取できるものである。

「石囲い」の上部は木材で天井とし、その上に大規模な積石を行います。

「石囲い」部分は内法で長さ約 7m、幅約2. mを測り、現状で約 1.1m、本来の高さは1.5m程度と考えられます。「石囲い木槨」の内部には、長さ約 5m、幅 1m内外のコウヤマキ製の長大な刳抜式木棺をおさめていました。



中心主体部

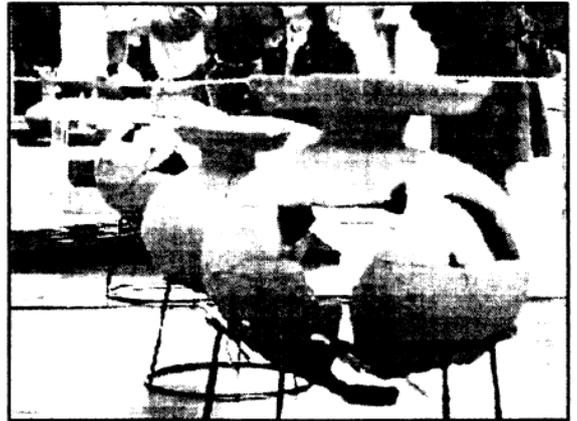


中心主体部の埋葬イメージ図

この古墳の主人の遺骸は、木の棺、木の部屋、石の部屋によって幾重にも厳重に包み込まれていました。埋葬施設の上部には石を積んだ長方形の壇があったと推定され、このまわりにはさまざまな文様で飾った二重口縁壺を、ほぼ一定の間隔で長方形に並べていました。

### さまざまな文様で飾った二重口縁壺

出土した二重口縁壺は土器の編年上、庄内式（3世紀初頭～中頃）と呼ばれるものです



#### ◎出土遺物

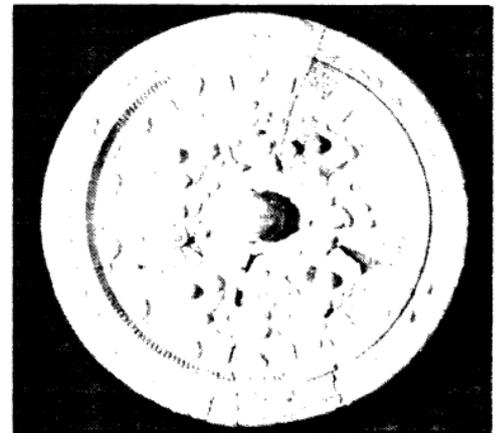
画文帯神獸鏡 1面、内行花文鏡片・半肉彫表現の鏡片若干、素環頭大刀 1口を含む

鉄製刀剣類 10口前後、銅鏃60本以上、鉄鏃 60本以上、農工具などの鉄製品多数、

二重口縁壺 20体以上が出土しています。棺内には多量の水銀朱がみられます



画文帯神獸鏡細部



画文帯神獸鏡

57年倭国王が後漢に朝貢、金印を受ける  
 107年倭国王帥升が後漢に朝貢  
 184年黄巾の乱で、後漢乱れる

この頃倭国大乱

190年倭の各国が卑弥呼を共立  
 196年後漢の曹操、政治の実権を握る  
 204年この頃公孫氏、帯方郡を置く  
 220年後漢滅び、魏建国  
 221年劉備、蜀を建国  
 222年孫権、呉を建国  
 234年蜀の諸葛孔明没す  
 238年魏、公孫氏滅ぼす  
 239年卑弥呼、難升米らを  
     帯方郡及び魏に朝貢する  
     魏、卑弥呼を親魏倭王とし  
     銅鏡 100枚などを与える  
 245年魏の皇帝が難升米に  
     軍旗を与える  
 248年このころ卑弥呼没す  
     壹与即位  
 265年魏滅び、西晋建国  
 266年倭王女壹与、西晋  
     使者派遣



朝日新聞 2000年3月28日

三国時代

(朝日新聞 2000年 3月 28日と漢書、後漢書、魏志などから作成)

### ◎横穴式石室

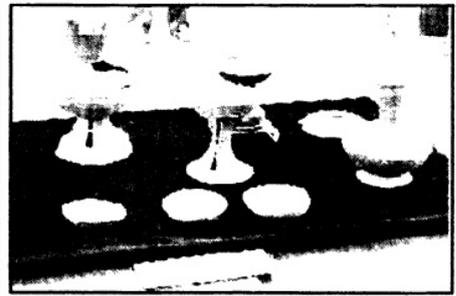
中心主体部西側に、6世紀末頃の横穴式石室 1基が墳丘を再利用してつくられています。両袖式で、玄室長約 5m、石室全長 14m以上を測る。玄室には組合式家形石棺を内蔵する。内部は徹底的に盗掘されており、須恵器、土師器、鉄釘などが出土したにとどまる。



横穴式石室と石囲い木櫛の上面



横穴式石室の玄室と石棺



出土した須恵器と土師器

## ●国津神社

纏向川北側に南面する旧指定村社。

御祭神は正哉吾勝連日天忍穗耳尊、大穗日命、天津彦根命、活津彦根命、

熊野樟椶日（くまぬくすひ）命の5柱である。さらに、合祭神として素蓋鳴尊が祀られている。

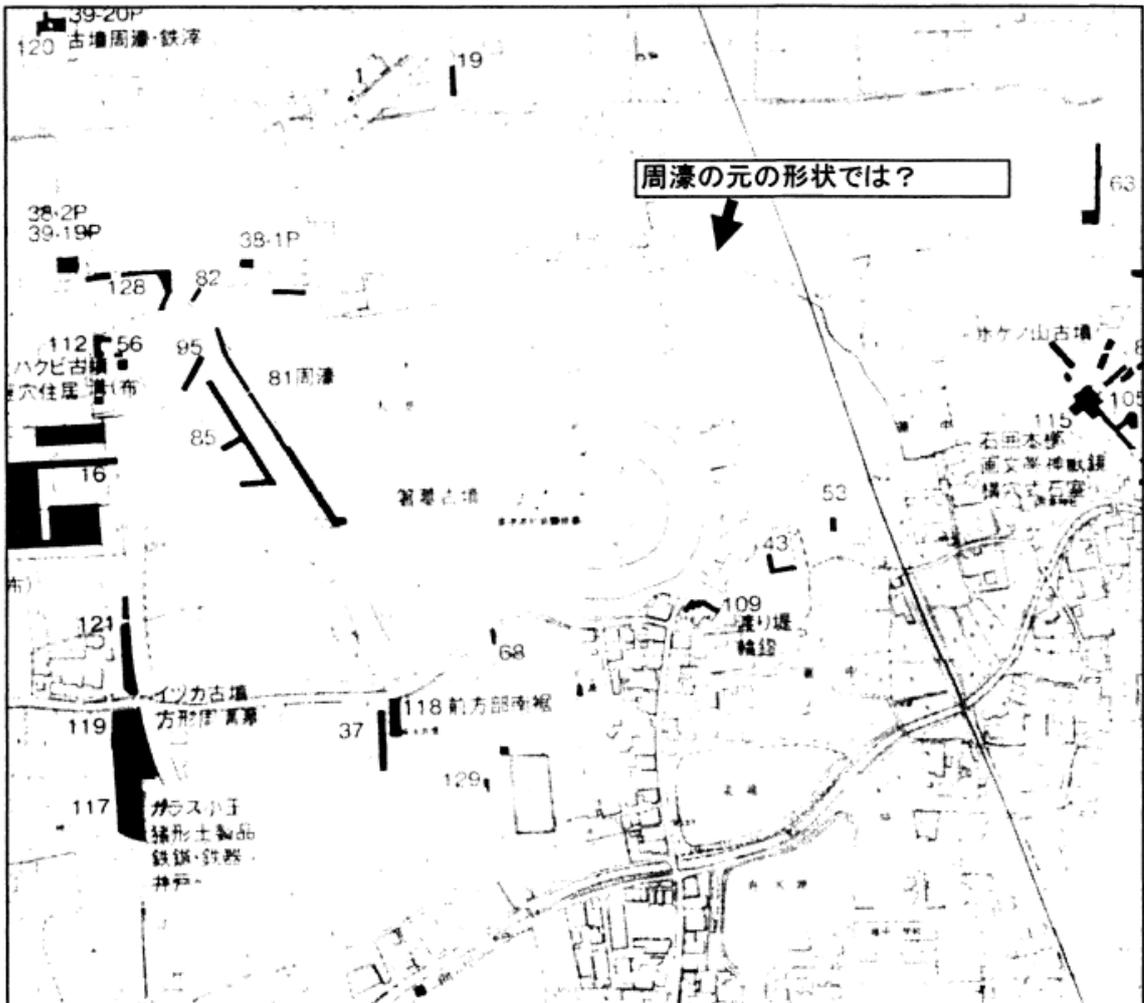
ちなみに纏向川下流の芝（南西約 800m）にもう一つの国津神社（九日神社）がある。素蓋鳴尊の剣から生まれた奥津島比売、市杵島比売、多岐津比売の三女神を祭嗣しています。

## ●箸墓古墳

大字箸中にある箸墓古墳は、最古級の大形前方後円墳です。墳丘部は宮内庁の管理により立ち入ることができませんが、古墳の周辺を桜井市などが発掘調査を行い、築造時の周辺の状況などが徐々に明らかになってきています。

全長 280m、後円部径 155m、前方部 125mの前方後円墳である。箸墓古墳は、宮内庁により倭迹迹日百襲姫命（卑弥呼?）の陵墓とされている。

私は地形から周濠はもっと大きく、三重ぐらいの周濠を持つと思っています。



『纏向遺跡』発掘調査地点より抜粋

平成第 129次調査地は、墳丘の南側約 100mに位置しています。この辺りはこれまでに確認された濠の、さらに外側をめぐる濠が想定されている範囲にあたります。そうした濠の存在を直接示すような遺構は発見されませんでした。植物の細片を多く含んだ泥炭(でいたん)質の粘土層が確認されました。この層が形成された時期は、出土した土器(布留0式)の年代から古墳時代初頭頃と考えられます。

つまり、300年を前後する時期となる。このことから箸墓古墳が造られた当初、墳丘の南側には湿地帯が広がっていたと考えることができます。(周濠の可能性あります。)

朝日新聞平成 20年8月28日付で周濠がこれまでの想定幅の2倍を超えるとの記事が出ました。



纏向遺跡第平成 20年 (2008) 157次

調査で前方部の南西側で発掘調査を行ったところ、前方部に向かって広がる大きな落込み(深さ1.3m以上)の一部を検出することができ、出土した土器などから箸墓古墳の築造時期と近い時期(3世紀後半頃)であると考えられました。

落込みの最下層は腐植土(滞水した場合に形成される層)であったことから、周濠の可能性あります。

朝日新聞 2008年8月28日記事

## 「箸墓」周濠幅2倍超

**桜井市教委調査 強大な権力示す**

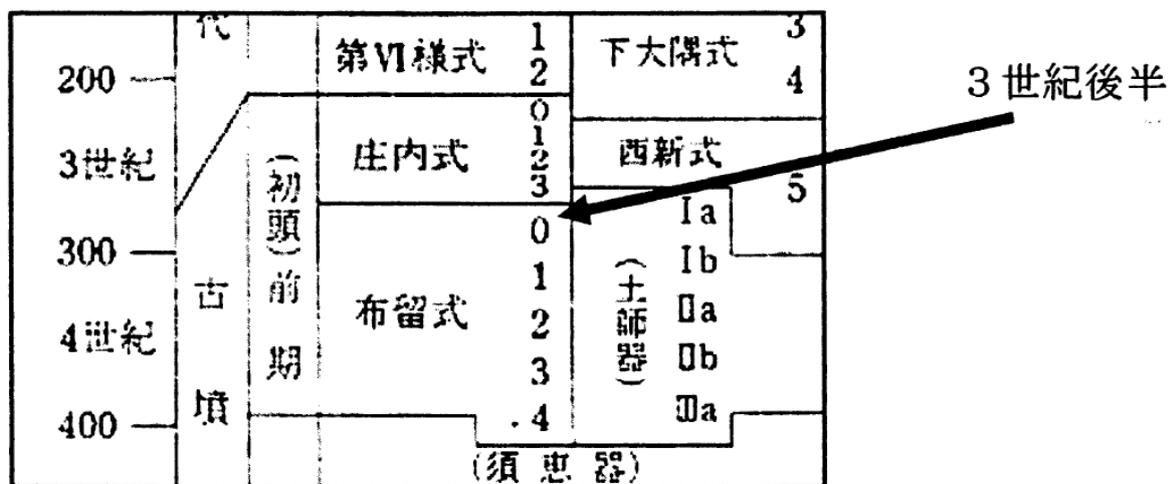
邪馬台国の女王・卑弥呼の墓との説もある奈良県桜井市の国内最古級の大型前方後円墳、箸墓古墳(3世紀中ごろ)の後半、全長約280m)で、前方部の外側に幅60〜70mの周濠が造られていた可能性が高いことが、同市教委の調査でわかった。これまでの箸墓古墳の想定復元図

住宅開発に伴い、市教委が5〜7月に箸墓古墳の南西約70mで約110平方メートルを調査し、溝のようなくぼみの跡(長さ約30m、深さ最大約1・3m)が見つかった。出土した土器から箸墓古墳と同じ3世紀後半に造られたとみられ、水が流れた跡もあることから、古墳の周りを取り囲んだ周濠の可能性が高いと判断した。

箸墓古墳に詳しい奈良県立橿原考古学研究所の寺沢薫・総務企画部長は「大型前方後円墳の先駆けの箸墓古墳がどう整備されたかを知る貴重な手がかり、全体像を明らかにしてほしい」と話す。

平成10年（1998）第109次調査では、後円部では初めての調査が行われ、今まで実態のよく解っていなかった箸墓古墳について実に多くの事柄を知ることができました。まず第一には墳丘周囲の構造が解ってきたことです。古墳の周囲には幅約 10m程度の周濠と、その外側に基底幅 15mを越える大きな外堤が巡っていたようです。また外堤の所々には墳丘へと繋がる渡り堤が築造当初から付設されていたと考えられ、後の景行天皇陵（天理市・渋谷向山古墳）などに代表される渡り堤を持った古墳のルーツとも言うべき様相を呈していた。

第二には築造時期の問題です。後円部の墳丘そのものを調査した訳ではありませんが、築造当初から後円部と同時に構築されたと考えられる渡り堤や外堤の盛り土内部から出土した土器の内、最も新しいものは布留0式と呼ばれる 3世紀後半の土器群であることや、周濠の埋没時期、前方部での調査成果などを考え合わせると箸墓古墳の築造が布留0式期（3世紀後半）の中で完結していると考えられます。



寺沢薫氏による弥生時代から古墳時代の土器編年

### ●纏向遺跡と邪馬台国研究

『日本書紀』神功皇后条に、倭の女王の貢献記事がある。「三十九年。是年、大歳己未(たいさい、つちのとひつじ)。魏志に云はく、明帝の景初三年の六月（明帝は 239年正月に死んでいるので六月は齊王芳即位の後）、倭の女王、大夫難升米を遣わして、郡(帯方郡)に詣(いた)りて、天子に詣らむことを求めて朝献す。太守鄧夏、(帯方郡太守・魏では劉夏)、吏(り)を遣わして将(あ)を送りて、京都(けいと・魏都洛陽)に詣らしむ。(魏志、倭人伝は、「献じたのは男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉る」。

また「(倭の女王に)親魏倭王となし、金印紫綬を仮し…孝順をなせ」。また、絳地交竜錦五匹・緯五十四・絳地縹栗罰(すうぞくけい)、十張・蒨絳(せんこう)五十四・紺青絹五十四を貢直に答う」。とあり、特に(倭の女王に)「紺地句文錦三匹・細班華厨(さいはんかけい)五張・白絹五十縹匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各々五十斤を賜う」「四十年、魏志に云はく、正始の元年(240年)に、建忠校尉梯携(ていけい)等

を遣わして、詔書印綬を奉りて、倭国に詣らしむ。」(魏志、倭人伝は、このあとに

「倭王に拝仮し、詔を齋(もたら)し、金帛・錦厨・刀・鏡・采物を賜う」とある。)

「四十三年、魏志に云はく、正始の四年(243年)、倭王、復(また)使(つかい)大夫伊聲者(いささんが)・披耶約(いさか)等八人(やたり)を遣わして上献す。」

この倭の女王が住まいする場所はどこか、古来、多くの学説がある。

九州説・畿内説等を筆頭に四国・琉球・北陸・中国・紀外等全国に所在を推定されている。出土遺物から見ると畿内説・地理的には九州説が考えられるが、この纏向遺跡が「倭(ヤマト)」とする説が多い。また、九州から畿内に移ったとする東遷説もある。ほんの少し、学説を紹介します。

#### ◎新井白石説(江戸中期の学者、詩人、政治家)

我が国における本格的な邪馬台国研究の先駆者は、新井白石である。新井白石は、正徳六年(1716年)に完成させた『古史通或問』において、「魏志は実録に候」と述べており、魏志倭人伝に現れる倭の国々を実在の地名に比定していった。

対馬國を対馬、一支國を壱岐、末慮國を肥前の國松浦郡といった。現在でもほぼそうであろうと考えられている比定地は、彼が最初に著したのである。

卑弥呼は神功皇后であるとして、邪馬台国問題は彼によって初めて学問として研究する対象となったと言える。

『古史通或(つうわく)問』で彼は邪馬台国は大和の國であるとしながら、その後に著した『外国之事調書』では、邪馬台国は筑後の國山門郡であると書いている。即ち、邪馬台国大和説から九州説に転じた事になる。

#### ◎内藤虎次郎説く戦前を代表する東洋史学者)

雑誌文芸に『卑弥呼考』を発表し、邪馬台国大和(奈良県)説を唱えた。

魏志より後の『随書』『北史』に出てくる邪摩堆(ヤマト)とは、塊志で言うところの邪馬台であるという記述を受け、随も今の大和が邪馬台園と看破した証拠であるとし、当時の人口七万戸を擁する程の地域は大和地方以外に考えられないとした。内藤は卑弥呼を「倭姫命(やまとみめのみこと)」に初めて比定した事で知られる。

#### ◎久米邦武説(九州説)(佐賀藩出身の明治・大正期の歴史学者)

卑弥呼は委奴国王である。

#### ◎星野恒説(九州説)(新潟県出身の明治・大正期の考証的歴史学者)

筑後山門(やまと)にいた田油津媛の先祖である。

#### ◎菅政友説(九州説)(明治療代初期の石上神宮大宮司)

邪馬台国を薩摩大隅と比定している。

#### ◎本居宣長説(九州説)(江戸時代中期の国学者、神道(しんとう)学者)

邪馬台国を筑紫。

#### ◎樋口隆康説(橿原考古学研究所長)

大和(おおやまと)古墳群学術調査委員会で「前期古墳の築造年代を、全体的に引き上げて考える必要がある」と発表している。そして、ホケノ山古墳近くの「箸墓」(一部に卑弥呼の墓といわれてきた)は、これまで、三世紀後半あるいは、四世紀始めごろ作られたとされてきたが、最近では三世紀半ばの西暦 250 年前後につくられたと見る考古学者が増えてきた。このことは、箸墓は、卑弥呼の墓であると主張する人たちにとって、歓迎すべき見解で、卑弥呼の死を 248 年とすると、箸墓の建設年代と一致するからである。前漢や後漢初期の中国鏡の分布の中心は北部九州にある。これに対して、後漢末の画文帯神獸鏡や三世紀中から後半のものと想定される三角縁神獸鏡の分布の中心は畿内に移動している。すなわち、三世紀初頭ころ

を境に、中国鏡の分布の中心は九州から畿内に移っている。このことは、日本の中心勢力は、この時期には九州から畿内に移っていたことを示している。

### ◎都出比呂志氏説く大阪市出身の考古学者。大阪大学名誉教授)

纏向遺跡のように最近の考古学から考えると、三世紀の日本列島における人と物の交流は、関東から九州の範囲に広がっている。このような時期に、政治と交流が九州の中だけで完結していたとは思われない。このことは、(邪馬台国のような)三世紀の政治の中心は、畿内にあったと見るほうが自然である

### ◎寺沢薫氏説(橿原考古学研究所調査研究部長)

最近の考古学から見ると、纏向遺跡には三世紀前半から後半にかけて、最古の定型化された前方後円墳である箸墓古墳と、これに先立つ6基の前方後円墳が作られている。これが前方後円墳の誕生とみることができる。この纏向遺跡型前方後円墳が日本列島、各地にひろがり後世、多くの前方後円墳が出来ることになる。このことは、三世紀前半から後半にかけて日本の中心が畿内にあったとみることができる

纏向遺跡の特徴は、日本列島の各地から大量の土器を運び込ませていることである。纏向遺跡から出土する土器類は、実に40%が近畿以外の土器類である。これを産地別に見ると近畿圏外(40%)土器類の半分が吉備(岡山県)地方のもので、残りがほぼ同じ割合で、愛知、出雲、北九州で製造されたものであった。そして、僅かではあるが、埼玉県からの土器も発見されている。このことは、西暦220年から300年に栄えた纏向遺跡は、少なくとも北九州から愛知までの範囲を勢力圏(あるいは埼玉県まで)としていたことになる。

卑弥呼が日本に君臨していたころ、纏向遺跡の統治者は、九州北部から愛知までの西日本を統治していたのである。纏向遺跡の活動期と箸墓の建設時期が卑弥呼や壺輿(あるいは台与)の活動期と一致してきたということは、卑弥呼の活動の場所が「纏向遺跡またはその周辺」と考えてもよい。

私は出土遺物から見た寺沢薫氏説が有力と考えます。

## ●参考文献

纏向石塚古墳 第9次調査 現地説明会資料 2006年3月25日 桜井市教育委員会  
ホケノ山古墳 現地説明会資料 2000年4月 大和古墳群調査委員会  
『纏向聖前方後円墳とそのひろがり一関東編一』橋本輝彦 1996 桜井市教育委員会  
『纏向型前方後円墳の築造』考古学と技術 寺沢薫 1988 同志社大学  
『纏向石塚古墳第8次調査の概要』橋本輝彦1996 桜井市教育委員会  
『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49冊 寺沢薫編 1986 橿原考古学研究所  
『纏向』石野博借・関川尚功 1976 桜井市教育委員会  
『纏向遺跡発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報 1976年度』久野邦雄・寺沢薫 1977 橿原考古学研究所  
『纏向石塚古墳範囲確紀調査(第4次)概報』萩野儀征・寺沢薫 1989 桜井市教育委員会  
『大和を掘る17』勝山古墳 第2次・纏向遺跡第111次 大西貴夫 1999 橿原考古学研究所附属博物館  
『大和を掘る16』纏向遺跡 102次・纏向勝山古墳 青木香津江 1998 橿原考古学研究所附属博物館  
『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県報告書 第42冊

より  
『桜井市歴史散歩』栢木喜一 昭和48年 桜井市役所  
『日本書紀』(上) 宇治谷孟 昭和63年 榊講談社  
『日本書紀』(上) 坂本太郎ほか 1984年 榊岩波書店  
『大和志・大和志料』(下) 奈良県教育全編 昭和62年 榊臨川書店  
『日本の古代遺跡』5 奈良中部 寺沢薫他 昭和59年 榊保育社  
新訂『魏志倭人伝他三篇』石原道博 1998年 榊岩波書店  
朝日新聞 2000年3月28日 ホケノ山古墳記事  
朝日新聞 2008年8月28日 箸墓古墳記事  
卑弥呼誕生 大阪府立弥生文化博物館 1197年

## 纏向遺跡発掘調査の主な遺構・遺物

古墳等名称	NO	主な遺構・遺物	時代
祭祀土坑	140	土坑・古式土師器・竈・木製品	古墳前期
太田池	(149)	木製仮面. 井戸. 土坑. ピット. 落ち込み. 土器片. 木製品	古墳前期
メクリー号墳	23	土師器・北陸系装飾器台. ミニチュア舟・籠	古墳前
	27	土壙・溝・方形周溝墓・木棺墓・土器. 棺墓	古墳前
	31	方形落ち込み	古墳前
	33	土坑・木製農具	古墳前
	47	掘立柱建物跡・メクリー号墳. 土坑・銅鏃・木棺. 銅鉞. 木製三角鏃. 砥石・鳥形土製品	古墳前
	48	木製三角. 四角鏃・掘立柱建物・木棺・土器棺. 盤・杖・籠 鶏形壺. 蛸壺形土器・鏡形土製品	古墳前
神殿状建物遺跡	20	土師器. 須恵器. 掘立柱建物跡. 銅鏃. 砥石	古墳前
	21	土師器. 須恵器. 南北溝	古墳前
	162	柱列. 建物群. 大量の土器	古墳前
纏向珠城宮跡 伝承地付近	50	導水施設・溝・建物跡・木製品・弧文板 木器・木鏃溝. 井戸. 竪穴. 壺棺・河道北岸50導水施設・溝(庄内). 建物跡・木製品・弧文板 須恵器. 柱列. 漢. 鉄滓. 砥石韓式系土器	古墳前
	90	土師器・須恵器・掘立柱建物跡・溝・石敷遺構・韓式系土器木器・木器・木鏃	古墳前
	29	溝・井戸・竪穴・壺棺・河道北岸	古墳前
	50	導水施設・溝(庄内)・建物跡・木製品・弧文板	古墳前
	90	土師器・須恵器・掘立柱建物・溝・石敷遺構・韓式系土器 木器・木鏃	古墳前
	80	古墳前期溝. 柱列・フイゴ羽口. 鉄滓・砥石	古墳前
	132	木製品・井戸状遺構	古墳前
	103	溝・土師器・須恵器・瓦器・サヌカイト片	古墳前
	65	土師器・絹製巾着・漆塗盾・案(物を置く台)・絵画土器	古墳前
	107	土師器・須恵器・溝(布留1)・瓦器・椀・石組	古墳前
	94	土師器・須恵器・瓦器・埴輪片	古墳前
78	区画溝(布留)・埴輪・土師器	古墳前	
104	土師器・須恵器・円筒埴輪片・金環・区画溝	古墳前	
纏向日代官跡 伝承地	54	土師器・須恵器・瓦器・石釧・滑石製勾玉・管玉(布留)・ガラス児玉	古墳前～ 中世
	88	土師器片・柱穴	古墳前
慶運寺付近	97	縄文前期土器・石鏃・瓦器・羽釜・中世砦跡	縄文前 期・中世
ホケノ山古墳付 近	83	土師器・須恵器・葺石・周濠・横穴式石室	古墳前
	91	土師器・須恵器・周濠・葺石	古墳前
	105	土師器	古墳前
	115	土師器・須恵器・石囲木郭・画文帯神獸鏡・横穴式石室・石棺・銅鏃	古墳前・後
箸墓古墳	37	土師器器片. 洪水砂(内濠部か?)	古墳前～ 後
	43	土師器・布留3の土器包含層(周堤部か?)	古墳前
	68	土師器(布留). 須恵器. 埴輪片. 周濠状遺構	古墳前
	81	葺石. 木製品. 墳丘盛土. 周溝. 堤状遺構. 周濠状遺構	古墳前
	82	土師器・須恵器・素堀溝	古墳前
	85	サヌカイト片・砥石・周濠状遺構	古墳前
	95	サヌカイト剥片. 黒色土器. 埴輪. 円板状土製品. 人形木製曲物底板	古墳前
	109	土師器・須恵器.	古墳前
	118	周濠・7C前洪水跡	古墳前
	129	土師器片・洪水堆積・腐植土層・外堤	古墳前
	(157)	前方部に向かって広がる落ち込み(深さ1.3m以上)	古墳前

# 纏向遺跡



500m

